

わが国におけるドイツ“母の家”方式による ディアコニッセ養成の歴史

広島文化学園大学看護学部
佐々木 秀 美

要約

我が国でディアコニッセ (Deaconess) 養成を開始した日本人、長谷川保の生涯を概観しながら、ディアコニッセ養成について歴史検証を行い、福祉思想を主眼にしつつ“看護・福祉・教育”の協働による地域福祉貢献について検討した。

長谷川保の生涯は常にキリスト者として自身に厳しく、他者への愛にあふれていた。キリスト教会の同志と共に、昭和の始めに、医療からも社会からも家族からも見放された貧しい結核患者たちに無償で奉仕し、戦後、国会議員となった後は、貧困と飢えに苦しむ国民を救う法律の整備に力を尽くし、ドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成を導入し、医療・福祉・教育の発展に尽力した。その思想の根底にあるのは、カルヴァン主義思想であり、その実践は無一物の人々が、独立独歩で生きるすべを、実践を通して直接体得してどんな困難や貧乏にも勝ちうるようにさせた日本力行会海外学校での実践的な教育であると考えられた。ゆえに、長谷川がキリスト教信者として隣人愛にあふれ清貧な中にも強い意志力を有し、生涯を通して社会貢献する驚異的な実行力を持つ人物でありえたのであろう。地域福祉活動において彼が果たした役割は大きく、それは国の福祉政策をカバーする偉大な活動であった。地域福祉の問題の探求は国民全ての共通課題であるが、とりわけ、生活の前提条件である健康の維持・増進・回復のためのケアをする看護師にとって医療・福祉・教育面からの探求は重要である。

キーワード：長谷川保の生涯、ドイツ“母の家”方式、ディアコニッセ養成、地域福祉思想

■ はじめに

わが国におけるディアコニッセ (Deaconess) 養成は、浜松聖隷十字の園で始まった。ディアコニッセとは、女性の助祭もしくは執事をさす。ギリシャ語で Dia on は女性を意味する。Diakonos という言葉は新約聖書に出てくる言葉であり、家事の雑役に使える者をさした。これをディアコニッセとしたのは、その養成を開始したドイツのテオドール・フリードナー牧師¹⁾である。

前号における筆者の『ドイツにおけるディアコニッセ養成がナイチンゲールに与えた影響について』²⁾は、フローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale) の著作『カイゼルスヴェルト学園によせて』³⁾を手掛かりにしつつ、ドイツにおけるディアコニッセ養成の歴史概観及びその道を開いたとされるフリードナー牧師の生涯と思想について検証、同学園がナイチンゲールに与えた影響についての研究報告である。

フリードナー牧師のディアコニッセ養成における教育の原点は、女性の聖務として、あるいは個人・慈善団体としての地域福祉への貢献であり、彼によって訓練されたディアコニッセ達は同学園の“母の家”を拠点として求められる場所へ出向、社会貢献した。カイゼルスヴェルト学園で学んだナイチン

ささき ひでみ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学看護学部

ゲールは、どのような種類の不足に対しても、神が満たし給う恩恵をいつでも見つけることができると述べ、彼女らが教会の“召使い”として奉仕に携わっていたのをみる時、女性にも神に与えられた役割があると述べた。そしてナイチンゲールは、自身が有する女性に対する高邁な感情、すなわち、女性が社会で有用であることの正当性を保証する大きな根拠になり、後の看護教育思想の原点になったと考えられた。フリードナー牧師とナイチンゲールはともに、女性問題に対する取り組みで、女性を尊重するという、女性の能力を無駄にしないということ、女性をして地域社会に貢献させるという取り組みでは一致したが、教育方法とその体系的な施策では大きな違いがあった。ナイチンゲールは、当時、主流の科学論を参考にしつつ、看護の専門職者として女性を育成することによって、女性の経済的・精神的自立・社会的自立を推進することであった。そして、ナイチンゲールが推進した看護教育は、明治時代に我が国に導入され、病院看護の質的向上に貢献し、人々の健康問題改善・維持・向上に多大な貢献をした。

他方、フリードナー牧師のディアコニッセ養成は、基本的に女性の聖務として、あるいは個人・慈善団体としての地域福祉への貢献であり、戦後、長谷川保⁴⁾によって我が国に導入された。ドイツにおけるディアコニッセ養成の歴史は、ドイツの看護教育が基本的に“母の家”方式として強く根付いていることから、ドイツの看護教育及び福祉政策の歴史においても、女性の役割拡大においても実に興味深い問題であり、看護教育の歴史の変遷を知る上でも重要なポイントである。フリードナー牧師が実施したディアコニッセ養成やナイチンゲールが実施した看護教育も基本的には人々の健康に関することであり、全ての人の幸福実現に向けた人権思想に基づく弱者救済活動である。その活動が日本にも及んだということは大層意義深い。そこで、本論では、我が国でディアコニッセ養成を開始した日本人、長谷川の生涯を概観しながら、ディアコニッセ養成について歴史検証を行い、福祉思想を主眼にしつつ“看護・福祉・教育”の協働による地域福祉について検討する。

1. 長谷川保とわが国におけるディアコニッセ養成

1) 長谷川保の生涯とその思想

ドイツにおけるフリードナー牧師のディアコニッセ養成は、国内外で大きく発展したが、牧師のディアコニッセ養成を日本に導入したのは長谷川保である。我が国の高齢者福祉に関する問題等は、個別と言うよりも、それぞれが相互に重なり合う公共の福祉、すなわち、社会集団に対する福祉思想の実現である。その福祉の実現に生涯をかけた長谷川については『長谷川保の生涯』⁵⁾『聖隷福祉事業団の源流 浜松バンドの人々』⁶⁾『神よ、私の杯は溢れます』⁷⁾『夕暮れになっても光がある』⁸⁾等を参考にした。

長谷川は、1903年（明治36年）浜松に生まれた。1921年（大正10年）、浜松商業卒業後、東京の日本力行会海外学校に入学した。日本力行会とは海外移住のための事業を行っている組織である。学校では、どんな困難や貧乏にも勝ちうるために、無一物の人々が、独立独歩で生きるすべを、実践を通して直接体得させた。その実践とは、無銭旅行や乞食の生活体験や他人が嫌がる仕事などである。海外学校の最も重要な科目は、『聖書』であり、その教義理解のためか長谷川は、内村鑑三⁹⁾の聖書研究会にも熱心に参加した。

1923年（大正12年）、日本力行会海外学校を卒業した後、長谷川は東京のクリーニング店で修業を始めた。ところが、9月に関東大震災が起き、修行半ばで浜松に帰った。そのころ、浜松基督教教会に植村正久¹⁰⁾が赴任し、浜松の地に教会形成のために“一粒の麦”¹¹⁾運動を行っていた。浜松に戻った長谷川は早速、この活動に共鳴し、11月には植村牧師より洗礼を受けた。

1925年（大正14年）、クリーニング店での修業が中途であった長谷川は、クリーニング技術習得のため、再び上京し、翌年の1926年（大正15年）に浜松に帰郷、聖隷社クリーニング店を開業した。同年、静岡県内屈指の日本楽器労働者組合がストライキに突入した。日本楽器は慢性的な不況の中で、生産過剰と滞貨のあおりを受けてハーモニカ部の解雇問題が引き起こされ、残留組も参加して会社側に抵抗したものである。経営者側は警察力に頼り、他方の労働者側は共産党中央本部から大幹部が応援に駆け付けるなど長期闘争となった。浜松市民を巻き込んだこの労働争議を契機に長谷川は、県無産青年同盟と

いう共産主義の組織に加わった。彼は直ちに戦闘的な幹部として行動した。しかし、この期間に長谷川はストライキを指導する戦闘的な共産主義者たちの行状の中に、決定的な人間性の罪とエゴイズムにとらわれた現実を見た。当時、浜松にはまだ赤線地帯があった。ここに通う彼ら指導者の性徳への無節操、不潔さを見るにつけ、彼らには人間性の救いがないことを実感した。また、浜松の無産同盟が実施したピクニックで、彼らが貧しい農民の大切な労働の生産物を盗んでしまう場面を目撃した長谷川は、その無節操に怒りが爆発し、1927年（昭和2年）には、早々に無産青年同盟を離脱した。

1928年（昭和3年）4月に再び無一物、裸一貫で上京し、神学社に入学した。神学社では高倉徳太郎¹²⁾校長の神学論議に触れた。長谷川が高倉校長から学んだことは、偉大な改革者ジョン・カルヴァン¹³⁾についてであった。東京での学習中、浜松の聖隷クリーニング店が経営危機に陥っていた。クリーニング店が経営危機対策の為に浜松に一時帰郷した長谷川は、クリーニング店の事務処理をしたのち、1929年（昭和4年）4月に復学した。同時期、安川八重子¹⁴⁾が神学社に入学してきた。ここから二人の出会いが始まり、1930年（昭和5年）に長谷川は八重子と結婚した。

1924年（大正13年）、生涯を通して志を同じくする鳥居恵一¹⁵⁾が花園として愛耕園を開設していた。長谷川と鳥居は浜松伝道所での活動を通して知りあったが、鳥居自身、結核で療養を余儀なくされた経験を持つ。1930年（昭和5年）、この愛耕園に当時の社会において最も忌み嫌われていた重症の結核患者2名を収容した。結核の知識が全くないこの時期、結核患者が吐き出す大量出血（喀血）に仰天した家政婦が逃げ出し、後任も定着しないために長谷川は、クリーニング店の仕事を辞めて、結核患者の看護に専念することにした。「医療について、看護の予備知識があったわけではないし、また、結核患者たちの療養生活を経済的に続けさせる目算が立ってのことではない。見通しはなかったのである。」¹⁶⁾と長谷川は述べている。愛耕園内で二人の患者が出す血液を連日内緒で、農地用の肥えツボに捨てにいく長谷川達の姿が地主たちに目撃され、激しく立ち退きを要求されるようになった。愛耕園内の粗末な療養室で気の毒な結核患者の悲惨な運命を見続けるたびに長谷川達は、ますます隣人への憐みの心に燃え、彼らへの奉仕の志は一層、強まった。高倉校長から学んだカルヴァンの神学は、長谷川の持つ神学論と一致し、胸深く刻みこまれていたのであろう。しかし、猛烈な反対運動に屈し、入野村に新しい土地を確保した長谷川達は、新築した病棟に結核患者たちを収容、キリスト教信仰による精神修養と自然療法による肉体の回復をめざしてペテル・ホーム（神の家）と名付けた。

1934年（昭和9年）、6月に長谷川は不敬罪で逮捕された。それは、長谷川が常日頃、日本の政治批判をしているのを聞いた者が特高・憲兵隊に密告したことによる。簡単な取り調べ後、釈放された。釈放はされたがしかし、長谷川には釈然としない思いが残ったのであろうか、日ごろ感じている政治の問題についての持論を“建白書”にして憲兵隊に提出した。その内容の第一は天皇の統治権の神聖、第二に理想的な政治の在り方である。思想の自由は文明国の特徴であるにも関わらず、言論・集会・結社の自由を圧迫するのはいかなるものか、第三に結核患者の処遇についてである¹⁷⁾。この一通の建白書を検証した西村牧師は、長谷川の信仰的、思想的意義は高く聖隷の歴史を貫いて不動の精神的・思想的原点であると述べた。あらためて、掲載された建白書の内容を概観すると今日の日本国憲法に謳われている、天皇の問題、国民の基本的な人権問題が論じられており、感服する。

同年、賀川主催の“イエス友の会”全国大会でペテル・ホームの土地確保のために一粒献金が開始され、1800余円の献金が集まった。長谷川は、そのお金で中川村と三方原にまたがる約二万一千坪（約七ヘクタール）の県保有の土地の払い下げに成功した。11月、ペテル・ホームは聖隷保養農園と改称し、聖隷発展の基盤ができた。1937年（昭和12年）4月の深夜、重症結核患者18名をペテル・ホームより三方原の聖隷保養農園に移送した。この後、聖隷保養農園における活動が婦人雑誌『主婦の友』¹⁸⁾に掲載された。悪いことに、この雑誌への掲載が結果的に結核患者の収容と存在を表象化させ、またもや三方原村・中川村より患者受け入れ反対運動がおきた。さらに悪いことに8月に長谷川が臨時応召を受け、一陸軍曹長として北支戦線に出征することとなった。

1938年（昭和13年）、長谷川不在の状況下で迫害は益々激しくなり、保養農園は経営困難に陥った。保養農園が経済的に困窮する中でも結核患者の看護は引き続き行われ、重症結核患者であった鈴木唯男¹⁹⁾らは、回復後、自然大気安静療法を編み出した。それは日課のリズム生活の励行、自然館環境・清浄な

外気などの適正な活用などの通年遂行であった。散歩では散歩の“散”のかわりに算数の算を用い、算歩とした。一分間何歩の速度で何歩あるいたか。何分歩いて何分休んで、その休んでいる間に脈拍がどういう風に変化したかを記録する。そして更には病気の看護から病人の看護へと発展させ、病人の内面に配慮した精神的看護が必要であった。患者は悔いのない生きた生活を望んでいた。

長谷川は、4月に体調を崩し、運よく北支戦線より浜松に帰還した。聖隷保養農園は熾烈極まりない状況であり、農園が襲撃される状況にまで陥っていた。長谷川の論駁で一時、この危機は乗り越えたがその経済的窮乏は激しく、患者と職員のためのその日の食糧を買うことすら困難であった。その頃の我が国の死因第一位は結核であった。1935年（昭和10年）ころより、国の結核予防対策が見直され、1939年（昭和14年）、結核予防会が設立され、厚生省に結核課が作られ、大規模で組織的な結核撲滅対策が繰り広げられることになった。これら国の対策が功をなしたか、12月に“奇跡”とも思えるような出来事があった。それは、昭和天皇より保養農園に特別下賜金が付与されたことである。そのことによって聖隷保養農園に対する迫害が終結した。この下賜金を基に財団法人聖隷保養農園が成立した。

1940年（昭和15年）、聖隷保養農園に附属内科医院を設置、渡辺兼四郎²⁰⁾が院長として就任した。そして、重症結核から回復した鈴木と同じく重症結核患者であった大橋徳三²¹⁾等も加わり、結核への近代的療養の試みがなされた。1941年（昭和16年）、聖隷保養農園は静岡県下において第一の結核療養所または虚弱者更生農場として日本屈指の存在に成長した。同年12月、長谷川は大政翼賛会中央協力会議に“結核撲滅建設案”を提出した。この資料は現在、確認できていないようであるが、内容は、聖隷保養農園が年末に開催したクリスマス事業のメインテーマである“捧げよう、結核撲滅運動に”の趣旨と同様ではないかと考えられた²²⁾。大政翼賛会というのは、日中戦争および太平洋戦争期の官製国民統合団体として1940年（昭和15）結成され、政治的中心組織である。

1945年（昭和20年）、戦局が極めて危ない中、本土決戦もありうるという事で三方原には陸軍部隊・空軍部隊が配置され、戦闘体勢についていた。梅雨期になると水が三方原台地に氾濫して農家の被害が著しかった。長谷川らは農民のために排水路を作った。その後の大雨で排水路の効果が顕著にあり、農民は救われたが、逆に陸軍部隊内が大洪水となった。陸軍部隊は激昂し、工事の責任者である長谷川が逮捕されるという事態を招いた。その後、浜松は度々の大空襲を受け、戦災負傷者、被災者ら多数が三方原に多数身を寄せた。6月に長谷川は翼賛壮年団長となった。8月に日本は終戦を迎えた。日本敗戦という混乱の時期に長谷川が考えていたのは“われ、いま、何をなすべきや”であった²³⁾。

終戦直後、長谷川が園長として聖隷保養農園の全員に訴えたことは以下の九点である。

- 一、祖国復興運動の中核となる聖隷修道院を創設すること。同人は修道士となり、必死祖国が復興するまで献身無報酬とすること
- 二、生活困難と付近農民の診療に従事すること
- 三、貧窮結核患者の収容治療看護に当たること
- 四、戦災孤児、母子、老人、不具者、傷病者などを収容生活せしめること
- 五、農場を拡大し、食料増産に邁進して主食の確保を期すること
- 六、授産事業を興すこと
- 七、精密工業を期するための工場を建設すること
- 八、キリスト教に対する教育事業を起し、祖国復興の国土を養成すること
- 九、キリスト教の殿堂に邁進すること²⁴⁾

長谷川が、祖国復興に対して求めた以上の緊急かつ重点的な内容は、至極実行困難な課題ばかりであったが、長谷川の行動力は誰にも増して力強く前進する知力・体力と行動力を有していた。戦後、初の衆議院選挙が開始されることになった。1946年（昭和21年）4月の選挙で初当選した長谷川は、日本社会党の代表として、憲法の制定に加わり、人間の基本的な人権の確保に奮闘し、生活保護法制定に尽力した。しかし、翌年の1947年（昭和22年）に長谷川は、戦中に三方原翼賛壮年団長であったことを理由に、翌年1月には公職追放²⁵⁾された。そこで、長谷川はめげることなく浜松での活動を積極的に展開した。

1948年（昭和23年）に浜松基督教会が日本基督教団遠州教会と改名し、西村一之牧師²⁶⁾が着任してきた。彼は、後に設置されたディアコニッセ養成に大きく貢献した人物である。肺結核はますます蔓延し、

聖隷保養農園はいつも満床であった。まず、日本楽器などの浜松の有力企業や教会の信者や一般市民に寄付を募り、集まった寄付金で病棟を増設した。

1949年（昭和24年）からは、結核治療に外科療法導入を決意、東大教授であった都築正男²⁷⁾が着任した。浜松の郊外の三方原の名もない聖隷保養園で外科治療を始めるといふ驚異的・画期的な実験が開始されることになった。都築教授が名もない浜松の結核療養所に着任を決意した理由には、長谷川の説得力に依拠することもあったろうが、まず、第一に保養園の結核療養生活を高く評価したこと、次に都築教授自身もクリスチャンであったこと、最後に都築教授も長谷川と同じく公職追放の身であり、蟄居中であったことなどが重なっていた²⁸⁾。都築の公職追放の理由は彼が戦中、海軍軍医少将であったことである。聖隷保養園で都築が最初に行った手術は胸郭形成術であった。肺の病巣のある側の肋骨を切り取り、肺葉病巣を圧迫させ、結核菌を閉じ込め、活動を阻止するというこの手術療法は、その弊害が戦後、論じられるまでの一時期、中心的な外科療法であった。保養農園ではこの外科治療に併せてペニシリン・ストレプトマイシン等の化学療法も行った。

戦後、GHQ（General Head Quarters・Supreme Commander For The Allied Powers）も介入して平和憲法と呼ばれる日本国憲法が制定され、1947年（昭和22年）に施行された。その憲法によって国民の基本的な人権が保障され、1948年（昭和23年）には看護職の基本法である“保健婦助産婦看護婦法”も制定された。この法律で甲種、乙種の2種類の看護婦ができ上がり、前者は入学資格を高等学校卒、教育年限は三年課程、国家試験によってその資格が認められ、免許を与える監督官庁は厚生省となった。後者は入学資格を新制中学校卒、教育年限は二年課程、地方長官による免許の認定であった。この教育制度に対する不合理について看護婦自身からの抗議行動が始まった。しかし、医師会側は、日本の当時の経済力はまだ回復しておらず、三年制の教育課程にするよりも二年制にしたほうが教育の回転が早く、看護婦の需要に応じる事ができるという意見が圧倒的であった。看護婦問題解決に向けて設置された看護制度小委員会のメンバー達²⁹⁾も医師会と同意見であった。看護協会はこの案を承服しかねたが、結局、了解し、1951年（昭和26年）“准看護婦制度”が発足した。この制度は“新法”と呼ばれ、甲種看護婦は“看護婦”に、乙種看護婦は“准看護婦”という名称に変わった。しかし、我が国の経済が飛躍的に発展しても尚、この准看護師制度の問題は残り、解決できないでいることは看護界の面々が認識している事実である。

1950年（昭和25年）8月に公職追放が解除され、9月には再び衆議院議員に当選した長谷川は、1952年（昭和27年）、法律の施行と同時に聖隷准看護婦養成所を開設した。

敗戦後、同じ同盟国であったドイツから一人の牧師が日本を訪れた。彼の名前はポール・ゲルハルト・ミューラー博士³⁰⁾である。ミューラー博士の視察に同行したのは賀川牧師と長谷川である。敗戦後、復興の遅い日本の現状、上野駅近辺に群がる戦災孤児たちの悲惨さを目撃したミューラー博士は、日本のキリスト者が何もしないのか？といぶかしがり、ドイツのディアコニッセ運動について説明した。彼は帰国すると直ちにディアコニッセの日本派遣計画に取り組んだ。ミューラー博士はブレーメン郊外の教区で牧師として教会の役割を担いつつ、ドイツ、スイス、オーストラリアの深夜伝道協会一夜の女伝道・厚生協議会一の議長として指導的立場にあった。ドイツに帰国したミューラー博士は直ちに日本委員会を結成し、多くの団体に呼び掛けてディアコニッセ派遣を計画した。結果、多くの応募者が名乗り出たが、最終的にブレーメン“母の家”から、ドーラ・メンデフリーダ・ヤンセン、ミュンスター“母の家”からハニ・ウォルフ³¹⁾、デッドボルト“母の家”からイルムトルート・フォン・ハウグイツ、エルゼ・バルミツの5名が選出され、日本語の学習や歴史、文化・宗教などの学習を始めた。ドイツでの派遣体制は整ったがしかし、受け入れ側の日本での体制が整わず、彼女らが来日できたのは1953年（昭和28年）であった。

そして、1954年（昭和29年）に浜松ディアコニッセ“母の家”が設立された。最初のディアコニッセ志願者は山浦ミツ³²⁾、市川一二三³³⁾である。ドイツ人ディアコニッセ、ウォルフは、1954年（昭和29年）から、准看護婦養成所の教務主任代行を務めた。ウォルフは自身の名前が狼みたいだと嫌っており、日本名で羽仁姉妹と呼ばせていた（以降、羽仁姉妹とする）。羽仁という姓は、自身のハニと日本の羽仁もと子³⁴⁾の羽仁から選んだのではないかとされている。自由学園の創立者羽仁は、『婦人の友』を創刊

した人物であるが、キリスト教の信仰を中心にし、実際的な家庭の合理化や生活の合理化、近代化を推進していた。羽仁は、浜松聖隷を支援している浜松友の会に積極的に関与していた。その関りによって羽仁姉妹と羽仁もと子との関りも必然的であり、相互に知りえたことゆえの日本名であったと考えられている³⁵⁾。

1956年（昭和31年）に長谷川は、西村牧師をディアコニッセ研究のためにドイツに派遣した。西村牧師が帰国した1957年（昭和32年）、ディアコニー学校を設置し、ディアコニッセ養成を開始した。浜松聖隷におけるディアコニー学校設立の発案者は、羽仁姉妹である。羽仁姉妹は最も長く日本に滞在し、聖隷看護学校の教育や浜松ディアコニッセ養成の教育に携わり、ドイツ一時帰国中も、日本での老人ホーム建設費用を調達するなど、我が国の福祉活動に多大なる貢献をした。1961年（昭和36年）、社会福祉法人十字の園が認可され、特別養護老人ホーム十字の園が開設された。1963年（昭和38年）、彼女が活動した十字の園における高齢者のための施設は、老人福祉法制定時の最初の特別養護老人ホームとなり、我が国の高齢者福祉のモデルとなった。そして、ペテル・ホームから始まった聖隷農園は社会福祉法人聖隷福祉事業団として、福祉サービス事業、医療保健事業、教育事業を運営する真に医療・福祉・教育の協働を推進する日本最大規模の事業団に成長した。



図1. 献体された長谷川の人体骨格（聖隷資料館所蔵）

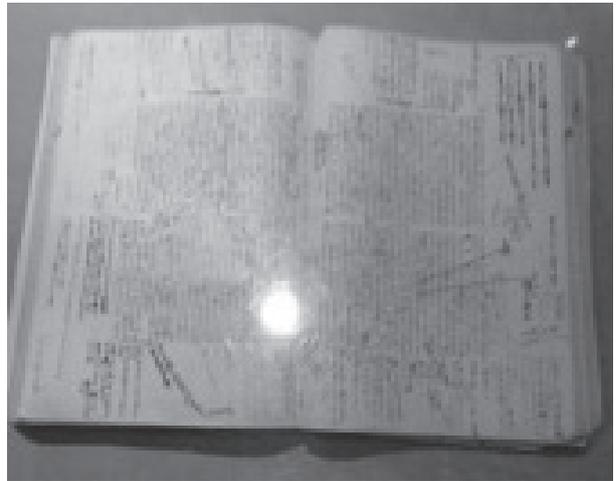


図2. 長谷川が愛用した聖書（聖隷資料館所蔵）

長谷川保、彼の生涯は常にキリスト者として自身に厳しく、他者への愛にあふれていた。キリスト教会の同志と共に、昭和の始めに、医療からも社会からも家族からも見放された貧しい結核患者たちを受け入れ、無償で奉仕し、戦後は日本復興のために国会議員となり、貧困と飢えに苦しむ国民を救う法律の整備に力を尽くした³⁶⁾。優れた先見性と行動力で、時代が求める社会事業を自力で切り開き、医療、福祉、看護教育など、いずれも後世のモデルとなる事業であった。その思想の根底にあるのは、『聖書』の教義とカルヴァン主義思想であり、その実践については日本力行会海外学校の無一物の人々が、独立独歩で生きるすべを直接体得させ、どんな困難や貧乏にも勝ちうるようにとの実践的な教育があったからであると筆者は考える。その教育を純粋に受け止めた結果、長谷川が生涯を通して時代を先取りし、ぐいぐいリードする驚異的な実行力を持つに至ったのであろう。掲載した上の左側の図1は、教育に貢献したいという長谷川の遺言によって献体されて作成された長谷川の人体骨格である。右側の図2は長谷川が愛用した聖書である。何回も熟読し、学習した事柄について空白部分に手書きメモが残されている。

2) 浜松聖隷におけるディアコニッセ養成

賀川牧師主催のイエス友の会が聖隷保養農園のために“一粒献金”を実施して募金活動をしたことは

先述した。この時、上映されたのが『ものいう手』であった。このフィルムはフリードナー牧師が始めたドイツ、プロテスタント教会に属して奉仕活動をする婦人たちの活動を収めたものである。その内容は盲聾啞の三重苦を負う児童たちに手話を教える情景を撮ったものであった。その婦人たちをディアコニッセと呼ぶという。フィルム持参者は無名の結核患者だった青年であったが、長谷川を含め、多くの参加者に感動を与えた。長谷川はこの、このフィルムを自身で保存していた。しかし、この時点では長谷川はその活動のすばらしさについて認識しても、自身の手でディアコニッセ養成をするという決断はできていなかったと考えられる。その決断は、先述したドイツのミューラー牧師の後押しによる。

フリードナー牧師が設立したカイゼルスウェルト学園で訓練を終了したディアコニッセ達は、同学園の“母の家”を拠点として求められる場所へ外向し、社会貢献した。ディアコニッセの教育に当たったのはゲルトルト・ライヒャルト³⁷⁾である。彼女はどんな仕事でも嫌がらず静かな霊的な態度と病気を看護する技能とは、真の奉仕女として全ての者の模範となった。しかし、一番にフリードナー牧師の考えを具現化したのは妻のフリードリケ・フレーベル³⁸⁾であった。養成されたディアコニッセの活動は国内外から認められ、1864年（明治元年）には“母の家”のディアコニッセは16,000人となっていた。そして、カイゼルスウェルト学園はディアコニッセの拠点となり、100年間に組織は大きく飛躍し、47,000人のディアコニッセがドイツ国内外の職務につき、120の“母の家”がそれぞれの活動分野を持って活躍している。

ミューラー博士のディアコニッセの日本派遣計画でブレーメン“母の家”、ミュンスター“母の家”、デッドボルト“母の家”の3事業団体から5名のディアコニッセが選出され、1953年（昭和28年）に日本に派遣された。派遣されたディアコニッセの一人、羽仁姉妹は知性・行動力が人一倍あったようで、彼女の提唱で長谷川は、ディアコニッセ養成を決断したと考えられる。1954年（昭和29年）、浜松ディアコニッセ“母の家”が設立され、1957年（昭和31年）には、西村牧師をドイツに派遣し、情報収集させ、帰国後の1957年（昭和32年）にディアコニー学校を設置、ディアコニッセ養成を開始した。浜松聖隷に設立されたディアコニー学校は4年課程であり、入学者選抜は（原則4月入学）教会牧師の推薦と本人の面接による。入学後、生徒は以下の課程を修了するシステムである。

1年間は、“母の家”で聖書、ディアコニッセとしての精神を学び、家事家政一般の原理学習と実習を行う。

2年目は聖隷准看護婦養成所を受験、合格後、准看護婦養成所生徒として入学する。

3年目も養成所の二学年として在学し、生活を“母の家”におく以外は、すべて養成所の課程を履修する。同卒業後、県の検定試験受験し准看護婦の免許証を取得する。

4年目は准看護婦養成所の生徒の場合には、1年間の聖隷病院勤務での就労が義務づけられ、それ以外のディアコニー学校の生徒は6か月を病院に、残りの6か月を、“母の家”の指示する分野での奉仕活動の実習を行う。

この4年間の全課程を修了した者に、ディアコニー学校の卒業証書を授与する、というシステムであった³⁹⁾。このシステムの中で、フリードナーが開設したドイツ“母の家”と若干相違があったのは、ドイツ“母の家”は生涯独身であることが原則であったが、羽仁姉妹から、浜松聖隷の学校ではディアコニッセとしての精神と實際を体得し、結婚を許可し、それぞれの教会で主に使える人になることが提案されたことである。“母の家”に生活基盤を置くディアコニー学校の生徒には、ディアコニッセとしての精神が強く求められた。その訓練内容に羽仁姉妹の理想的なディアコニッセ像がある。

『ディアコニア』⁴⁰⁾に掲載された文章の内容を要約すると、羽仁姉妹が最も重要であると考えたことは、“精神性”の問題である。彼女によれば、地域社会を含め生活協同の中では、一般的に国家やある組織の中には法律や規則がある。しかし、生活共同体である“母の家”では、そうした規則より神と人に対する責任という問題がある。日毎、聖霊の導きに立っているならば、それは神のまえにもつ静思や聖言への追及によることである。それは規則よりも神の言の中に求めねばならない。次に、羽仁姉妹は聖パウロのコリント人への手紙、“愛する兄弟たちよ、われらの主、イエス・キリストの名によって、常に一つの語らいに導かれ、対立することなく、たがいに一つの心、一つの思いに堅く立つ”という言葉を用い、キリストを中心とした生活共同体で互いに語らいあうことによって豊かな人生の智慧を見出すこと

ができる」と述べた。そのうえで、彼女は「他人の思いに同調し賛成することがいかにむづかしいものか！それに反して、他人の欠点や過ちを見付け、話すことは如何に容易なことかと述べ、共同生活の中で争いと不和ほど惨めなものはないと述べた。もし、その各々が一つの体の肢としてつらなるならば、理想的な生活共同体になる。そのためには互いに教育しあう事、語り合う事、互いに愛し合うこと、分かち合う事である。要するに、生活共同体の中を支配している共同精神が健全であるならば、日毎の規則はそこから生まれるのであり、神の御霊が私どもの中に支配権をもっていれば、時間厳守、整頓秩序、良心的にすることなどは自然にできていく。そして神の人への奉仕と愛が生まれてくるものだということである。羽仁姉妹が言いたかったことは、生活共同体の中に引き起こされる問題は、規則によるものではなく、生活共同体の中を支配している共同精神が健全であるならば、必然的に日毎の規則はそこから生まれる。そして、神の御霊が私どもの中に支配権をもっていれば、時間厳守、整頓秩序、良心的にすることなどは自然にできていくという事であり、堅苦しい規則などは不要であるという事である。

2. “母の家”におけるディアコニッセ日常生活訓練

ディアコニッセとして“母の家”に所属すると日常生活訓練が開始される。その訓練の主たる内容は、“沈黙”“完全”“服従”“共産”である。

まずは、最初の訓練は“沈黙”⁴¹⁾である。口から出るものの不潔さ、つまりは、ところ構わず吐き散らす痰の中の病原菌による悪弊が人々を死に至らしめると同様に、集団生活をするディアコニッセが、その与えられた狭い環境の中で、人間と人間の間をよりよく保とうとしたら、何にも増して重要なことは沈黙である。

そして、二つ目の訓練は“完全”⁴²⁾である。その制服を着たら、身も心も歩き方の一つ一つまで、ディアコニッセに完全になりきることであり、自身の行いのせいで他に迷惑をかけることのないようにしなければならない。つまりは、自身の行いに責任を持つことである。小事に不忠なるもの大事にも不忠なりはルカの教え（ルカ16：10）であると記述されている。ルカというのは、新約聖書の『ルカによる福音書』及び『使徒行伝』の著者とされる人物である。つまり、（ルカ16：10）は、『ルカによる福音書』の16章の10節のことであると考えられる。

三つ目の訓練は“服従”⁴³⁾である。まことの協同動作のためには、その信頼のみが命令と服従関係を人格的なあかるいものとし、相互の協同動作を透明なほほえましいものとする。好き嫌いをこえてそういう死の共同体がつくられないかぎり、キリスト教会もキリストも有名無実となるということである。つまり、信頼があれば服従できるという事であろうか。

四つ目の訓練内容は“可能”⁴⁴⁾である。ディアコニッセにとって不可能という言葉は禁句である。不可能を可能とするのは、自分の栄光のためではなく、神と人への愛ゆえである。成るか成らないか、それはいつ実現するか、いっさいを神にゆだねて、我々はただ仕えればよいのである。成功をもって信仰の証明とするような態度は堅く戒めねばならないということである。

最後の訓練が“共産”⁴⁵⁾である。“共産”については冒頭にこの言葉を聞いてアカイな一と思わないでくれと言いながら、ここでいう共産とは、私有財産という一切の概念から、生活共同体における分かち合いの精神からなる理想的な生活形態であると述べられている。“共産”という言葉と赤いという発想との関連で説明するとしたら、共産主義思想における革命時運動家たちが赤旗などを使用したことが始まりとされている。著者は、そうした思想的な関連性から共産と言えば赤という誤解を受けないために最初に注釈を加えたのであろう。そして、ディアコニッセ養成におけるそのキリスト教的精神の訓練が始まったのである。『ディアコニア』⁴⁶⁾には、レーへのサイン入りの“ディアコニッセの言葉”（下図）が挿入されている。レーへとはヴィルヘルム・レーへ⁴⁷⁾の事である。この“ディアコニッセの言葉”の原図を写真にして、ドイツから送り届けてくれたのは羽仁姉妹の同期である。その内容は、主イエス・キリストに対して忠実に仕えること、死ぬことを恐れなくて何にも感謝の気持ちで奉仕することである。ディアコニッセ達はこの言葉を毎日のように暗唱し、身も心も献身的な活動が実践できるよう求められた。

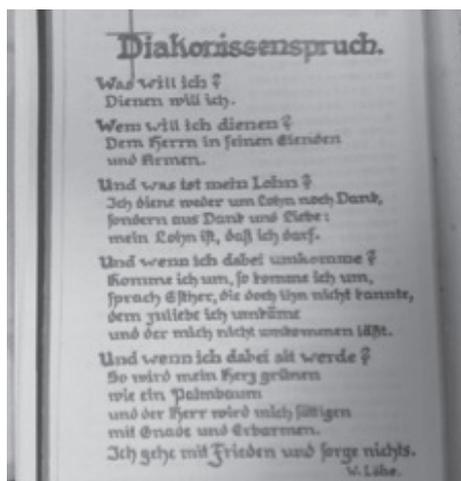


図3. 『ディアコニア No.2』より

「私は何をしましょう。
わたくしは仕えたいのです。
私は誰に仕えようとするのでしょうか。
主に悲しむ人と貧しい人に仕えて、さらば、私の報酬は何ですか、私は報酬のために、感謝を受けるために仕えません。
感謝と愛から仕えるのです。
ではもしそれで死んでしまったら、死ぬべき時には死にます。

主を知らないエステルでさえ言いました。
私は、主のために喜んで死にたい、けれども私は私を死なしめません。
かくて年老いた時には、私の心は棕櫚の緑のように若やぐでしよう。
そして主は、恵と憐みをもって飽かしめ給うでしよう。わたくしは安らかにいきます。私には何の願いもありません。」⁴⁸⁾

西村翻訳の奉仕女のことば

1956年（昭和31年）に発刊された『浜松ディアコニッセ年報』には上記の“ディアコニッセのことば”が掲載されている。翻訳は西村牧師であり、平易である。“レーへの言葉”にある棕櫚（シュロ）というのはキリスト教圏で聖書に多く記述されるヤシ科植物のナツメヤシのことを指し、西洋絵画において、棕櫚（実際はナツメヤシなど）は勝利および殉教を象徴する図像として描かれる。従来、戦争に勝利した軍隊が凱進行進の際に持ち歩く姿が描かれたが、初期キリスト教会はこれを死に対する信仰の勝利と読み替え、殉教者を意味する言葉として定着した。

また、文中に登場するエステル（Ester）⁴⁹⁾は、旧約聖書にある歴史物語『エステル記』の主人公のユダヤ人女性のことであろう。ペルシア王クセルクセス1世（在位紀元前485-465）の時代、高官であるハマンという人物がユダヤ人であるモデルカイを陥れ、ユダヤ人全ての殺害を決めたことから、モデルカイの養女であったエステルは決死の覚悟でその計画を王に打ち明け、ユダヤ人を助けたという事である。エステルは後にクセルクセス1世の妃となったという伝説がある。紀元前に実在したとされる伝説の女性エステルは、イエス・キリストのことを知る由もないが、彼女の死をも恐れない覚悟が人々の命を救ったという事では、ディアコニッセ精神の鏡たりえたる人物であったという事であろう。

初期の頃のディアコニー学校でその教育を受けた市川によれば、羽仁姉妹は、愛があれば犠牲はいらなないと述べ、夜勤と洗濯を一人で受け持っていたという。そして、実践において、例えば手が麻痺して硬直している方の洗面の時には、手浴も行い、匂いを嗅いで、その匂いがなくなるまでお湯を替えて手浴をするよう求めた。転院してきた高齢者の方は、顔が梅干しのように干からびていた。そこで、羽仁姉妹は水分補給をし、褥瘡のある方にはできるだけ風呂に入れ清潔にし、血液循環を良くすることで褥瘡が改善し、きれいな皮膚になった⁵⁰⁾と言う。

こうしたディアコニッセの本質をイエスの教えに基づいて説明した西村は、イエスの勤めの三つ目、

すなわち心身の不幸をめぐる医療（セラペイア）であり、狭義においてこれがディアコニッセに他ならないとした。イエスにおいては、言による救いの側面と愛の実践による救いの側面とは不可分で相補っている。言と業—行動ひいては信仰と倫理の不可分な統一こそイエスの人格または存在の独自性といえる⁵¹⁾。ちなみに第一は教え（ディダケー）を行う教師、神の国の福音という独一な神の救いの宣教（ケリュグマ）を伝える啓示者の働きである。少なくとも、ディアコニッセには、ナイチンゲールが求めた理論と実践の一致、という事と、優れた看護師の要件の一つ、自身のもてる最良の看護を患者に惜しみなく与えることと一致する。その仕事に邁進し人々の献身することこそがナイチンゲールの言う“神の道に通じる”ことなのであろう。羽仁姉妹はドイツに一時帰国したが、帰国中も、日本での老人ホーム建設費用を調達するなど、我が国の福祉活動に多大なる貢献をした。さらに、彼女が活動した十字の園における高齢者のための施設は、我が国の高齢者福祉のモデルになった。

1962年（昭和37年）、浜松ディアコニッセ“母の家”はドイツカイゼルスヴェルト連合百年記念大会で、ディアコニッセ“母の家”連盟に加盟したことが報告された。そして、現在、浜松のディアコニー学校は閉鎖され、その一部が、浜松十字の園の敷地内に残っている。当時、ディアコニッセとして教育され、ディアコニッセとして黙々と活動した一人、94歳になった山浦氏と面会し、対話を試みたがほとんど発言はなかった。“沈黙”、この教えは、彼女の中に永年にわたって心にとどめられた精神だったのではないか。そして、1952年（昭和27年）に設立された准看護師学校も235名の准看護師を育成したが、1966年（昭和41年）に閉校され、短期大学を経由して、1992年（平成4年）に浜松聖隷クリストファー大学として発展し、その役割を終えた。賀川牧師の“一粒の麦”運動における“一粒の麦が地に落ちてしななければそれはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら豊かに実を結ぶようになる”という言葉同様、ドイツ“母の家”方式によるディアコニッセ養成は、わが国の看護教育の発展の為の礎となり、大きく実を結んだという事である。

戦後、ドイツ人ディアコニッセ羽仁姉妹が日本で残したものは単に活動したということのみならず、福祉活動としてその精神性への影響が高かったことであろう。現在、日本におけるディアコニッセによる活動は、浜松聖隷の他に、神戸の“母の家”ベテルと東京の“ペテスタ奉仕女“母の家”の2事業団体であり、それぞれの設立理念に基づいて奉仕活動を実践している。

3. わが国における福祉思想の発展

日本では社会福祉という考えは歴史的に浅い。それでは、我が国における福祉思想は、戦後を待たねばならなかったのか？思想的には、古事記⁵²⁾の世界で見られるように神道が純粋な意味で人々の日常生活に根差している宗教である。しかしながら、神道には教義がないゆえに福祉に関する思想は見られない。鎌倉時代に導入された仏教の教えでは、人々の日常生活における苦悩は、人生の四苦（生老病死）・八苦であり、これを克服するには自身の正しい言動や正しいものの見方等を含んだ八正道によって欲望を抑え、精神的な安定を得る、つまりは悟りの境地を得る事であった。これは自助の精神につながるが、他者の救済という点からは菩薩が持つ慈悲の精神が重要視される。我が国の慈悲の象徴として光明皇后⁵³⁾の業績、すなわち、悲田院における慈善活動は慈悲の象徴として海外にも発信されている⁵⁴⁾。

人間の生存に関わる生活上の問題は、単に生存の危機ということだけであれば人間の歴史上古い問題であるが、社会の生産力が極度に低ければ、自然利用の能力も低く、災害・基金・伝染病などに対しても平和時においても生命の危機があるという事は、社会的に観察できる現象である。資本主義社会において犠牲者になりやすいのは高齢者・公害・労災患者・自己遺児、交通事故障害者などである。資本主義の原理（相対的過剰人口による低賃金と搾取による利潤の獲得）のために作り出された窮乏と、彼らにかかる費用が国民所得に組み入れられることによってその派生的諸結果への対策の上に成り立っている。わが国でも貧困と疾病、貧困と道徳的退廃との関連で、売春・犯罪・自殺などの悪徳、あるいは反社会的な行為がある。貧困は人間の健康や知能や社会的態度に及ぼす破壊的な影響があった。ゆえに、福祉といえば貧困対策という言葉が真っ先に連想される。

明治維新以降、貧困や浪人対策として設置されたのは東京養育院の施設に世話役となったのが瓜生

岩⁵⁵⁾である。瓜生は、困窮状態にある者達の救済事業を継続的に行った。瓜生の社会事業に影響を受けたのは石井十次⁵⁶⁾である。彼は慈善事業の一つとして岡山孤児院を設立した^{57)・58)}。日本のセツルメント運動は、岡山博愛会⁵⁹⁾による活動と片山潜⁶⁰⁾による東京・神田のキングスレー館が最も早いものとして知られている。片山は日本の労働運動家・社会主義者であり、キングスレー館の運営の傍ら労働運動にも力を尽くした。

1889年（明治22年）に大日本帝国憲法が公布されたが、同憲法下では、権利としての社会保障という考え方はなく、恩恵的性格が濃厚だった。1874年（明治7年）の恤救規則は労働能力のない者（老齢・重病・13歳以下）にコメ代を給付するという貧民救済のための法律である。富山県に起きた米騒動は一挙に国民諸階層の生活難によって成立、慈善的・半封建的な救済では間に合わなくなると同時に政府・資本家は社会事業の成立を先取りしなければならなくなった。この問題は社会問題調査と社会事業行政、方面委員制度、社会連帯論の3つにおいて典型的である。社会問題調査と社会事業行政については、1908年（明治41年）に設立された中央慈善協会があったが、1918年（大正7年）、社会問題解決のための本格的な調査機構として救済事業協会が勅令をもって設立された。方面委員制度は地方の有力者の名誉職的な奉仕活動が持つ社会事業行政における役割であり、現在の民生委員制度に受け継がれている⁶¹⁾。

1929年（昭和4年）に救護法、1922年（大正11年）に社会保険制度が交付され、1927年（昭和2年）に健康保険法、1938年（昭和13年）に国民健康保険法が交付された。1941年（昭和16年）の労働者年金保険法は、1944年（昭和19年）に厚生年金保険法と改称した。終戦後の社会事業・社会保障のあり方は、平和憲法の成立に依拠する。そして、戦後の混乱の中で、「ありの町」と呼ばれる地区で浮浪児と称される子ども達の救済活動があったことは有名である^{62)・63)・64)}。1931年（昭和6年）に開始された浜松における長谷川の結核患者収容という偉大な事業など、地域福祉活動に加え、わが国の福祉活動においてキリスト教が果たした役割は大きい。

そして、長谷川が浜松で結核患者への取り組みを開始する前に東京では、1927年（昭和2年）からフランス、パリ・ミッション⁶⁵⁾の伝道師ヨゼフ・フロジャック⁶⁶⁾の結核患者に対する取り組みがあった。その取り組みが『フロジャック神父の生涯』⁶⁷⁾に紹介されている。神父の結核患者に対する決死の取り組みは、わが国の医療・福祉政策の遅れをカバーする働きかけであった。著作中Ⅱの“底辺への出発”の章は、地獄の門のタイトルで始まる。これはフロジャック神父が東京市立療養所（中野にあった中野療養所⁶⁸⁾のこと）の一患者を見舞った瞬間の印象である。フロジャック神父は収容されている患者の光景から頭に弾丸を打ち込まれたような衝撃を受けた。著者、五十嵐はその衝撃を以下のように表現した。「この病院の正面玄関に、ダンテが地獄の入り口に取り付けた“ここに入らんとする汝は、すべての希望をすてるべし”との銘を刻んでもよいでしょう。不幸にも社会から取り残された千人くらいの病人は、肉体の苦痛と道徳の退廃のままに、気の毒な状態でくらししています。病室といい、寝具といい、まったくふた目と見られぬほどに汚れています。食事はいやなおいがします。冬になっても火の気もなく、十分にかけるものもない病人たちは、文字通り寒さで死ぬのです。夏になると、蚊やいろいろの虫に食われます。毎日10人くらいは死んでいきます。死体の取り片付けは一日二回しか行われません。死骸は目や口を大きく開いたままで、時には臨終に吐いた血に汚れたまま、放置されています。よく夜間にネズミがでてきて、その頬の一部をかじることさえあるのです。」⁶⁹⁾

ダンテというのはダンテ・アリギエーリ⁷⁰⁾のことであり、彼の戯曲“地獄の門”では、その入り口に“汝この門に入るべからず”という立札を取り付けた。リットン・スチレイター⁷¹⁾も『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』⁷²⁾のナイチンゲールの章では、戦地に建設された総合病院の現況から、ダンテの“地獄の門”の“汝この門に入るべからず”との引用文を入れ、病院が死への入り口であった⁷³⁾と述べた。つまり、クリミア戦争中の総合病院とわが国における結核療養所の結核患者の悲惨な状況はダンテの言う“地獄の門”であったという事である。

わが国では、1896年（明治30年）に“伝染病予防法”が制定されていた。1898年（明治32年）に行政は全国の結核死亡状況の調査を行った。その結果、結核死亡数は68,408人であった⁷⁴⁾。その後、1905年（明治38年）の内務省令では、結核が主として患者の喀痰を媒介して感染すると考えられたため、公衆の集まるところに痰壺の設置や痰の消毒、患者の居住した室内及び身の回りの品を消毒することが義務づ

けられた。1912年（明治45年）の医界時報⁷⁵⁾にも“結核療養所”問題が掲載されている。社会政策としてなかなか進展しないこの問題について、持論を展開するといったものではなく結核療養所の設置についての現状報告である。1913年（大正2年）、結核予防協会が民間団体によって設立された。1919年（大正8年）“結核予防法”が制定され、健康診断の実施や、予防に関することが規定された。その他、人口5万人以上の都市では結核療養所の設置を命じ、感染の恐れのある患者で療養の途がない患者を収容させるようにした。療養所を有する公共団体に対しては国庫補助と生活に困窮する患者には生活保護の道を与えた。そうした政策の中で1920年（大正9年）に公立の結核療養所として設立されたのが先述した中野の東京市立療養所である。結核患者への救済策としての行政的な形式は整ったが、実際、運用ということになると定着するまでに時を有したのである。日本の結核療養所の現況は、長谷川の生涯でも示したように戦前の結核慢延に対して十分な衛生行政が行われていなかったころの状態である。

1929年（昭和4年）からのフロジャック神父の活動は、療養所を出されていく当てのない人々を収容することから始まった。1930年（昭和5年）、東京市療養所のそばにベタニアの家⁷⁶⁾を新設、いく当てのない患者の収容を開始した。1932年（昭和7年）には結核を患って収容された患者の子供を収容するために乳児院ナザレトの家を設立した。そして、聖隷同様、准看護婦制度発足と同時に東京都とGHQの要請によって慈生会准看護学院が1953年（昭和28年）に設立された。

戦後、我が国は日本国憲法を制定し、社会保障制度に大きく影響を与える憲法第25条「生存権」が規定され、権利としての社会保障が確立し、日本の社会保障制度は急速に拡充された。憲法第25条に規定された条文、「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」という条文に社会保障制度に対する法的根拠を見出す。日本の社会保障制度には、①社会保険②年金保険③公的扶助（生活保護）④社会福祉⑤公衆衛生がある。1950年（昭和25年）に発足した社会保障制度審議会は内閣総理大臣吉田茂に当てて『社会保障制度に関する勧告』⁷⁷⁾を審議会会長大内兵衛⁷⁸⁾名で提出している。

その勧告の序説には「時代はそれぞれの問題をもつ。敗戦の日本は、平和と民主主義とを看板として立ちあがろうとしているけれども、その前提としての国民の生活はそれに適すべくあまりにも窮乏であり、そのため多数の国民にとっては、この看板さえ見え難く、いわんやそれに向かって歩むことなどはとてもできそうではないのである。問題は、いかにして彼らに最低の生活を与えるかである。いわゆる人権の尊重も、いわゆるデモクラシーも、この前提がなくしては、紙の上の空語でしかない。いかにして国民に健康な生活を保障するか。いかにして最低でいいが生きて行ける道を拓くべきか、これが再興日本のあらゆる問題に先立つ基本問題である。」と書かれ、その問題はそれぞれの解決法をもつ。として、以下のように書かれた。「貧困の問題は旧い問題である。旧い日本ですら、それぞれの時代においてその貧乏退治の方法をもった。このことはわれわれの民族のヒュマニチー（原文のまま）の歴史が十分に実証するところである。けれども、同じ旧い問題でもその解決の方法は、今日においては、全く別のものでなくてはならぬ。というのは、いまや人間の生活は全く社会化されておるからであり、またその故に国家もまたその病弊に対して社会化された方法をもたねばならぬからである。すでに外国においては、いわゆる社会保障の制度が著明な発達をとげているのはこのためであって、国によっては、「ゆりかごより墓場まで」すべての生活部面がこの制度によって保障されているとさえいわれる。日本でもこういう制度なくして、この問題が解決できるとはいえない。」⁷⁹⁾と述べられた。この「ゆりかごより墓場まで」の思想は福祉国家とされるイギリスやドイツにおいて提唱された福祉思想である。

大内はわが国の憲法研究会⁸⁰⁾のメンバーであるが、長谷川が社会党代議士として憲法の制定や生活保護法の成立に尽力したということであるならば、社会保障制度の根幹を形成した人物のひとりであったと考えられる。そして、キリスト教教義に基づいた長谷川のペテル・ホームから始まった聖隷農園における取組は、わが国の政策の遅れをカバーするとりくみであり、まさに医療・福祉・教育の協働を推進する施策の根幹であったと考えられる。

現在の社会福祉の対象は貧乏という概念に基づくが、福祉という概念が憲法における幸福の実現という人権思想に基づくならば、すべて人々が有する基本的人権であり、その理解が相互に必要である。

■ おわりに

本論では、長谷川保の生涯を概観しながら、我が国におけるディアコニッセ養成の歴史を検証、福祉思想を中心に“看護・福祉・教育”の協働による地域福祉について検討した。長谷川保の生涯は常にキリスト者として自身に厳しく、他者への愛にあふれていた。キリスト教会の同志と共に、昭和の始めに、医療からも社会からも家族からも見放された貧しい結核患者たちを受け入れ、無償で奉仕し、戦後は日本復興のために国会議員となり、貧困と飢えに苦しむ国民を救う法律の整備に力を尽くした。優れた先見性と行動力で、時代が求める社会事業を自力で切り開き、医療、福祉、看護教育など、いずれも後世のモデルとなる事業であった。その思想の根底にあるのは、神学社で学んだカルヴァン主義思想であり、その実践は日本力行会海外学校で学んだ、無一物の人々が、独立独歩で生きるすべを、実践を通して直接体得してどんな困難や貧乏にも勝ちうるようにさせた実践的な教育があったことが、海外学校での主要な教科目の『聖書』教育がキリスト教信者として隣人愛にあふれ清貧な中にも強い意志力を有し、生涯を通して社会貢献する驚異的な実行力を持つ人物でありえたのであろう。浜松聖隷における長谷川の結核患者収容という偉大な事業など、地域福祉活動に加え、わが国の福祉活動においてキリスト教が果たした役割は大きい。それは国の福祉政策をカバーする偉大な活動であった。

長谷川がなしたもう一つの事業、ドイツ“母の家”方式としてのディアコニッセ養成を我が国に導入したことである。我が国の看護教育は明治維新以降、ナイチンゲール方式が採用されたが、その根底にある思想や看護の本質論が問われなまま、推移し、戦後、GHQ 主導のもと、アメリカ方式の看護教育が推進された。“母の家”方式で有名なドイツの看護方式が戦後、長谷川によって導入されたが根付かなかった。ディアコニー学校のディアコニッセ達はその実践において求められたケア内容に現在、我が国の看護実践において見失われそうになっているケアの本質論がある。そして、1952年（昭和27年）に設立された准看護婦学校も浜松聖隷クリストファー大学として発展し、その役割を終えた。同大学がディアコニッセ養成におけるその精神やケアの本質論が継承されているとしたら、賀川牧師の“一粒の麦”運動における“一粒の麦が地に落ちてしななければそれはただ一粒のままである。しかし、もし死んだら豊かに実を結ぶようになる。”という言葉同様、大きく実を結んだという事であろう。

一般社会において国民の生活を維持・発展させていくための制度として基本的には、完全雇用制度や最低賃金制度の確立を図り、社会保障・公衆衛生・医療・教育などの一般施策を整備・充実させていくことが必要になる。社会福祉を研究し、発達させていくには、権利主体としての国民全ての共通課題であるが、とりわけ、生活の前提条件である健康の維持・増進・回復のためのケアをする看護師にとって重要な課題である。患者は、単に物質的な存在ではなく、社会的人として個々の患者の背景には、生活上の問題を抱え、それによって悩み苦しむ、あるいは適切な医療をうけられないでいる場合もある。

一定の社会階層の中でどの程度が貧乏と言えるのかの課題はあるが、貧乏が様々な生活上の障害（疾病・犯罪・家族崩壊）を引き起こすと同時に、身体的飢餓状態は生命維持に大きく影響する。貧乏が無知を作り出すという事と、無知がまた、病気との関係といった社会的悪循環を作り出す。ここには個人に必要な生存に関わる問題が存在する。戦後、平和憲法の制定と共に、社会保障制度も大きく広がったが、それも、見識のある我が国の先人たちの業績による。そうした活動の中で憲法成立過程における長谷川の果たした役割とはいかなるものであったのかについて今回は未検証であり、今後委ねる。

注釈

- 1) テオドール・フリードナー牧師 (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864) : プロテスタントの牧師。ドイツのカイゼルスヴェルトに赴任した際に、人々が経済的に苦境に陥っていたため、救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした。そこでエリザベス・フライ女史 (Elizabeth Fry 1780-1845 19世紀前半に活躍した英国の監獄改良家) の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした。その一環として1836年 (天保7年) に看護師の養成所も含めたカイゼルスヴェルト学園を創立した。
- 2) 佐々木秀美著：ドイツにおけるディアコニッセ養成がナイチンゲールに与えた影響について、看護

学統合研究 Vol.1, No.1, pp10-21

- 3) Florence Nightingale (1851): The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev. (湯楨ます他訳: ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスヴェルト学園によせて, 現代社, 1983年.)
- 4) 長谷川保 (1903-1994): 日本の福祉事業家・教育者・政治家. 社会党議員として衆議院議員を7期務める. 衆議院文教委員長, 社会福祉法人聖隷福祉事業団理事長などを歴任した.
- 5) 山内喜美子著: 聖隷長谷川保の生涯, 文藝春秋, 1996年.
- 6) 蛭名賢造著: 聖隷福祉事業団の源流—浜松バンドの人々—, 新評論, 1999年.
- 7) 長谷川保著: 神よ, 私の杯は溢れます, ミネルヴァ書房, 1983年.
- 8) 社会福祉法人十字の園編: 夕暮れになっても光がある, 聖霊サービス有限会社, 2010年.
- 9) 内村鑑三 (1861-1930): 日本のキリスト教思想家・文学者・伝道者・聖書学者. 福音主義信仰と時事社会批判に基づく日本独自のいわゆる無教会主義を唱えた.
- 10) 植村正久 (1858-1925): 日本の思想家・キリスト教の伝道者・牧師・神学者・説教家. 日本のキリスト教教会の形成に大きな役割を果たした.
- 11) 一粒の麦: 源流著者の説明によれば新約聖書ヨハネ福音書十二章二十四節にある著名な聖句「一粒の麦が地に落ちてしななければそれはただ一粒のままである. しかし, もし死んだなら豊かに実を結ぶようになる. 自分の命を愛する者はそれを失い, この世で自分の命を憎む者はそれを保って永遠の命に至るであろう.」の中のみ言葉である。『聖隷福祉事業団の源流』p42より.
- 12) 高倉徳太郎 (1885-1934): 日本基督教会の神学者, 牧師. 植村正久 (注10参照) の後継者,
- 13) ジャン・カルヴァン (Jean Calvin 1509-1564): フランス出身の神学者. マルティン・ルター (Martin Luther 1483-1546) やフルドリッヒ・ツブイングリ (Huldrych Zwingli 1484-1531) と並び評されるキリスト教宗教改革初期の指導者である. また, 神学校として1559年 (永禄2年) に創設されたジュネーブ大学の創立者である.
- 14) 安川八重子 (1907-1995): 長谷川 (注4) 参照) と同じ神学社で学び, 長谷川と結婚したのちは同じカルヴァン主義的キリスト教の教えに忠実に夫の事業を夫唱婦随で支えた.
- 15) 鳥居恵一 (1896-1959): 長谷川 (注4) 参照) とともに聖隷の初期を支えた創始者メンバー. 特に, 静岡県初の協同組合「消費組合浜松同胞社」は鳥居が中心となって運営された.
- 16) 蛭名賢造著: 前掲書6), p209.
- 17) 蛭名賢造著: 前掲書6), pp264-269.
- 18) 主婦の友: 1917年 (大正6年) に創刊された女性向けの月刊誌
- 19) 鈴木唯男 (1912-2016): 結核患者であったが, 療養中, 大橋徳三 (注21) 参照) より徹底した生活指導を受け, 両者によって自然大気療法を開発した.
- 20) 渡辺兼四郎 (1885-1954): ベテルホーム時代から真実の無償無私で結核患者を診療・援助した医師. 後に聖隷保養農園附属内科医院の院長, 財団法人聖隷保養農園理事長と長く深く聖隷と関わった.
- 21) 大橋徳三 (1897- 不詳): 長谷川保 (注4) 参照) の叔父にあたる人物. 重症の結核患者であったが回復後, 結核患者の生活指導にあたり, 聖隷独自の療養体制を作った.
- 22) 蛭名賢造著: 前掲書6), p352.
- 23) 蛭名賢造著: 前掲書6), 源流, p412.
- 24) 蛭名賢造著: 前掲書6), 源流 pp414-415.
- 25) 公職追放: 第2次世界大戦後日本で, 占領軍によって実施された追放の一つ. 1946年 (昭和21年) 1月4日, 占領軍当局はポツダム宣言に基づく日本民主化政策の一環として, 「好ましくない人物の公職よりの除去覚書」を発した. これに基づき公職追放令が施行された.
- 26) 西村一之 (1922-1966): 東京生まれ. 小学校の時に受洗. 青山学院中学に学び, 4年次に経済学生から神学生に転身. 神学生として応召され赤坂歩兵第一連隊に入隊したが, 結核性痔瘻のため不合格. 戦時中, 無職. 自宅で聖書研究や学術研究をする. 1948年 (昭和23年) 恩師の小塩力 (1903-1958 日本の牧師) から, 浜松聖隷福祉の事業と深く関わりを持つ遠州教会の副牧師として働くことを勧め

- られた。『聖隷福祉事業団の源流』 pp449-450より。
- 27) 都築正男 (1895-1961) : 日本の医学者, 東京大学名誉教授, 日赤中央病院長, 日本放射線影響学会初代会長を歴任. 海軍軍医. 最終階級は海軍軍医少将. 原爆症研究の権威として国際的に活躍し「原爆症研究の父」と呼ばれる.
 - 28) 蛭名賢造著 : 前掲書 6), p462.
 - 29) 看護制度小委員会のメンバー : 医師 - 橋本寛敏, 安藤晝 → 曾田長宗, 保健婦・助産婦・看護婦 → 井上なつえ, 湯植ます, 平井雅恵, 菅原よしみ.
 - 30) ポール・ゲルハルト・ミューラー博士 : (Paul Gerhardt Möller 1903-1998) : 『聖隷福祉事業団の源流』には P・G・メラー博士として紹介されているが, 正式名はポール・ゲルハルト・ミューラー博士. ドイツのプロテスタントの司祭, 宣教師, 神学的な作家. 彼は牧師としてブレーメン郊外の教区で教会の役割を担いつつ, ドイツ, スイス, オーストラリアの「深夜伝道協会—一夜の女伝道・厚生協議会の議長として指導的立場にあった. 『ドイツ総領事館経由 Dr. Michael Häusler から German Wikipedia-dictionary, German Wikipedia-dictionary』を紹介され, 調査した. (http://de.wikipedia.org/wiki/Paul_Gerhardt_M%C3%B6ller) . より
 - 31) ハニ・ウォルフ Hanni・Wolf 1914-1996) : イギリスに生まれたが, 父親の逝去後, ドイツで育ち, 栄養士の資格取得後, シュベスター (英語ではシスター) としてディアコニッセに加わり, 看護の仕事を引き受ける. 1953年 (昭和32年), 日本へ行き, 1954年 (昭和29年) から聖隷准看護婦養成所臨時教務主任代行を行う. 1957年 (昭和32年), 第一期“母の家”姉妹たちの教育課程を実施. 1959年 (昭和37年), ドイツへ一時帰国し, 老人ホーム建設のための献金を得て1961年 (昭和36年), 十字の園開設. 1966年 (昭和41年) ドイツへ帰国. アゼンハイムの老人ホームの責任者として働く. 日本でのハニは, 自身のウォルフという名前を嫌い羽仁姉妹と呼ばせていた.
 - 32) 山浦ミツ (1919-) : 市川一二三 (注33) 参照) と同時期にディアコニッセとして教育され, 羽仁姉妹から教育的感化を受け, 十字の園の看護師と生涯をささげた. 現在も存命中であり, 十字の園アドナイ館で静かに余生を送っている.
 - 33) 市川一二三 (1922-2011) : 浜松ディアコー学校で養成されたディアコニッセ. 羽仁姉妹から教育的感化を受け十字の園の看護師と生涯をささげた.
 - 34) 羽仁もと子 (1873-1957) : 日本で女性初のジャーナリスト. 自由学園の創立者で家計簿の考案者としても知られている.
 - 35) 蛭名賢造著 : 前掲書 6), p353.
 - 36) 山内喜美子著 : 聖隷長谷川保の生涯, 文藝春秋, 1996年.
 - 37) ゲルトルート・ライヒャルト (Gertrud Reichardt 1788-1869) : フリードナー牧師の父親の時代から仕事を手伝っていた医者の娘.
 - 38) フリードリケ・フリードナー (Frederike Fliedner 1800-1842) : テオドール・フリードナー (注1) 参照) の2人目の妻カイザルスウエルトで1836年 (天保7年) に新しく設立したディアコネッセハウスのリーダー. フリードリケは, ディアコネッセマザーとして彼女の夫と一緒にそこの訓練に関するアイデアを開発した. 多くの老人ホームにまだその名前が残っている.
 - 39) 蛭名賢造著 : 前掲書 6), p531.
 - 40) 深津文雄編 : ディアコニ No.9, p19-21, 1955年, 10月.
 - 41) 深津文雄編 : ディアコニ No.1, pp19-21, 1954年, 6月.
 - 42) 深津文雄編 : ディアコニ No.2, pp19, 1954年, 8月.
 - 43) 深津文雄編 : ディアコニ No.3, p10, 1954年, 10月.
 - 44) 深津文雄編 : ディアコニ No.6, p21, 1955, 4月.
 - 45) 深津文雄編 : 前掲書43), p10.
 - 46) 深津文雄編 : 前掲書42), pp12-13.
 - 47) ヴィルヘルム・レーヘ (Wilhelm Loh 1808-1872) : レーヘは, 1837年 (天保8年), 牧師としてノイエンドテッテルザウに迎えられ, 1854年 (安政元年) に奉仕女の教育と婦人の奉仕のための連盟を

- 作り，上下の秩序を保つための規則を作り，奉仕女の言葉を作った『ディアコニア No.2』より。
- 48) W・レーヘ作，西村一之訳：ディアコニッセのことば，浜松ディアコニッセ年報，1956年。
 - 49) エステル (Ester)：旧約聖書に出てくるユダヤ人女性，ペルシア王クセルクセス1世（在位紀元前485-465）の妃になっていることから同時期の女性であると考えられる。（<https://ja.wikipedia.org/wiki/エステル>参照）
 - 50) 社会福祉法人十字の園編：前掲書8）。
 - 51) 社会福祉法人十字の園編：前掲書8），p59
 - 52) 古事記：日本最古の歴史書。
 - 53) 光明皇后（701-760）：奈良時代の聖武天皇の皇后であり，藤原不比等（天智天皇の忠臣・中臣鎌足の子）の娘。仏教の庇護者であり，彼女は救ライ事業として悲田院を設立。公共事業の祖であるとされる。
 - 54) Lavonia Loyd Dock, A History of Nursing, Volume IV (1907), pp256-277, The Heritage Press, 1974.
 - 55) 瓜生岩（1829-1897）：明治時代の社会事業家。岩子とも呼ばれる。福島県出身，戊申戦争中，傷病兵の看護や貧困者救済活動を行った。
 - 56) 石井十次（1865-1914）：明治期の慈善事業家で岡山孤児院を創設した。その功績から，「児童福祉の父」と言われ，アリス・ベティ・アダムス（Alice Betty Adams 1866-1937 アメリカのアメリカン・ボード宣教師。医療・社会福祉に従事），留岡幸助（1864-1934日本の社会福祉の先駆者感化院教育の実践家），山室軍平（1872-1940 日本の宗教家。）と共に「岡山四聖人」と称される。
 - 57) 細井勇：石井十次と岡山孤児院，ミネルヴァ書房，2011年。
 - 58) 横田賢一：岡山孤児院物語―石井十次の足跡，山陽新聞社，2012年。
 - 59) 岡山博愛会：アメリカンボード宣教師アリス・ベティ・アダムス（注56）参照）によりたてられた。
 - 60) 片山潜（1859-1933）：日本の労働運動家・社会主義者・マルクス主義者・思想家・社会事業家。キングスレー館を1897年（明治30年），東京神田三崎町に設立し，労働者を対象とした学習会，幼稚園の経営などを行なった。
 - 61) 右田紀久恵・高澤武司：社会福祉の歴史，有斐閣，2008年。
 - 62) 松井桃樓：ゼノ死ぬひまない，春秋社，1998年。
 - 63) 松井桃樓：アリの町のマリア北原玲子，春秋社，1998年。
 - 64) 枝見静樹：かぎりない愛・ゼノの生涯，富士福祉財団，1981年。
 - 65) パリ・ミッション：パリ外国宣教会（Société des Missions Etrangères de Paris）のこと。通称ミッション会と呼ばれるカトリック男子修道会。外国宣教を目的とする教区司祭による最初の宣教会。1659年（万治2年），パリュール（Francois Pallu 1626-1684）によって開設された。日本には1831年（天保2年）朝鮮または香港を経て布教活動がなされた。
 - 66) ヨゼフ・フロジャック（Joseph Flaujac 1886-1959）：フランス，アベロン生まれ。1905年（明治39年）パリ外国宣教会神学校に入学，同時にソルボンヌ大学文学部にも籍を置く。1909年（明治42年）パリ外国宣教会神学校卒業と同時に司祭として叙階。日本に派遣された。
 - 67) 五十嵐茂雄著：フロジャック神父の生涯，緑地社，1960年。
 - 68) 東京市立療養所：1920年（大正9年）日本ではじめての結核患者を収容するために設けられた公立療養所。岩崎小弥太（1879-1945 日本の実業家）男爵が中野区江古田の別荘を寄付したと言われている。
 - 69) 五十嵐茂雄著：前掲書67），p113.
 - 70) ダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri 1265-1321）：イタリアの詩人。彼の戯曲は地獄・煉獄・天国について書かれたものである。
 - 71) リットン・ストレイチー（Lytton Strachey 1880-1932）：英国の伝記小説家。ケンブリッジ大学に学び，ロンドンで作家，芸術家の一員となり，批評家として出発した。『Eminent Victorians』は伝

記のジャンルにおいて典型的であり、自身満々で型破りな挑戦状となった。同著中、ナイチンゲールについての章は岩波から『ナイチンゲール伝』として出版されている。

- 72) Litton Strachey: Eminent Victorians, p121, Penguin Books, 1986.
- 73) Litton Strachey: 前掲書72), p119.
- 74) 菅谷明著: 日本医療制度史, p32, 原書房, 1978年.
- 75) 医海時報第935号, 1912年(明治45年)5月25日.
- 76) ベタニアの家 (Congregação das Irmãs de Betânia): ベタニアというヘブライ語の意味は神により頼む貧しい人の家という意味である.
- 77) 社会保障制度に関する勧告 (1950.10.16): (国立公文書館デジタルアーカイブ). <http://www.digital.archives.go.jp>
- 78) 大内兵衛 (1888-1980): 日本のマルクス経済学者. 東京帝国大学法学部経済学科を卒業後大蔵省の書記官を経て, 1919年(大正8年)に新設された東大経済学部に着任. 1950年(昭和25年)より1959年(昭和34年)まで法政大学総長に就任した. 日本学士院会員.
- 79) 社会保障制度に関する勧告 (1950.10.16): (国立公文書館デジタルアーカイブ). <http://www.digital.archives.go.jp>
- 80) 憲法研究会: 憲法研究会は, 1945(昭和20)年10月29日, 日本文化人連盟創立準備会の折に, 高野岩三郎(1871-1949 東京帝国大学教授 日本の社会運動家)の提案により, 民間での憲法制定の準備・研究を目的として結成された.